

ひよし川柳会

戦死した身内の痛手乞う平和

熊本 忠眞

頑健な爺は卒寿で野良仕事

川添 忠昭

健診の結果不安で切る封書

男武志津江

焼酎でせめぎ合ってる麦と芋

宮川 柳酔

麦めしと味噌で育ってまだ元気

渡辺 光男

小麦色にわたし鍛える野良が待つ

渡辺 照子

たっぷりの明治遺産の灯がともる

若宮 賢敬

ほどほどにそれが一番難しい

水野すみこ

健やかに育てと祈る母心

松本たつこ

遺産無視全部使えと子等が言う

山本 雅之

もめるほど遺産はないが借もない

栗木 一郎

万感の思い寿ぐ祝い酒

宇津本アヤ子

ゆるやかな春の音符に気を許す

米子 達雄

衆落に子供二人の夏休み

大川 眺春

遠き日の気まづき別れ灯蛾舞ふ

毛利 敦

開け放し風の遊び場夏座敷

小西 あや

高張りの灯に浮く雨の茅の輪かな

梶原 一美

高令化空家目立ちて草茂る

松岡 寛孝

聞き捨てし夫の緑言胡瓜もみ

井谷 けい

子子やまるで字のごと生きてをり

福本 恵子

かなかなを汐時にしていとま乞ひ

伊藤 京

いまここに生きて歩みぬかたつむり

浜田 千鶴

退職の靴から下駄へ夏来る

長田 徳子

百姓の血筋もうすれ青田風

高田 弘子

蟬の声集めて木々の鳴くごとし

藤田 光子

愛媛若葉ひろみ句会

鬼北の足跡を辿る…【等妙寺編 第3回】

中世の等妙寺の姿②

今回は、中世等妙寺の「境内」についてももう少し具体的に考えたいと思います。お寺の領域は必ず「四至」といって土地の境界が定められています。こうした境界には「四至勝示」といって標識となる杭を立てたり、そこに神様を祀ったりします。また、水は不浄を洗い清める力があるとされるため、川を境界とすることが多いことも仏教思想に由来します。こうした境界を定めることを「結界」といいますが、結界にはさまざまな作法（決まりごと）があります。どういった思想に基づいて建てられたのかを知ること、そのお寺が何を教義として大切にしていたかなどを知る手がかりになります。

「等妙寺縁起」には、等妙寺を建てるときに「山ヲ分ケテ四種ノ仏土トナス」といった結果作法に依っていることが記されています。「四種仏土」というのは、仏教の天台教学に基づく「四土結界」を示し、聖域と俗界とを分ける考え方です。簡単にいえば、下から世俗の世界、聖俗入り混じる世界、聖域・菩薩の世界、最上位が仏の世界というものです。また、「縁起」には、俗界から下、中、上の橋を通じて仏地である本堂に至る、と記されます。これらを

現地に照らし合わせると、下の橋は奈良川に架かる「等妙寺橋」で、中の橋は、橋はありませんが、今の等妙寺（かつての靈光庵）のあたりと考えられます。上の橋は、旧境内の中心部に「福寿院跡」というところがあります。その上に橋の基礎を石積みで造った遺構（写真）があります。それより上には、かつての本堂跡や修行のための坊院跡が立ち並んでおり、そこから郭公岳や鬼が城連山などの山岳へと繋がっています。

つまり、仏の境地に至るための場所として、そのものを仏地・聖域と見立てて伽藍中心部を築いたことがわかり、日本一の規模を誇る石積み伽藍を築くことも仏の境地に近づくための「修行」だったのかも知れません。



「上の橋」とみられる橋状遺構(南から)